

# 皆さん、明けましておめでとうございます

新年にあたりましてご挨拶と所感をお伝えしたいと思います。

昨年は、一昨年に引き続き新型コロナ感染に翻弄された一年でした。一昨年に比べ、かなり感染症状の改善や治療法が確立され、また予防接種が進んで、現在この原稿を書いている時点では一応の落ち着きを見せております。一方、新しい変異株の広がり懸念され、まだまだ予断を許さない状況であることは変わりありません。日中学院では幸いにしてクラスターの発生などは起こさずに複合授業やオンライン授業など活用しつつ学習環境を維持してまいりました。今年も引き続き感染防止に努めつつもコロナ下での学習と教育に努めていく考えでおります。

閑話休題。私は80年後半から6年ほど仕事でアメリカに滞在しましたが、その頃はちょうど日本が高度成長期の後バブル経済を経験してまさに“ジャパンアズナンバーワン”と浮かれていた時期でもあります。当時のアメリカ企業の多くは日本の製造業に打撃を受けアメリカが日本に買われるという危機感が渦巻き、ジャパンバッシングが吹き荒れた時期でもありました。その後はご存じの通りバブル崩壊とともに日本の経済は長く低迷が続き、いまだに復調できずにいるように見えます。日中関係は国交正常化50周年を迎えますが、今の日本と中国の関係は何か当時の日米の関係を彷彿させるような感じがいたします。日中間の様々な政治的経済的な課題は抱えつつも、地理的にも経済的にも離れられない両国関係であり、様々な問題を乗り越えて長く付き合っていくという選択肢しかありません。これからも日中の友好は続けていかなければなりませんし、それは民間交流からという側面には少しも変わりはないでしょう。少しでもお互いの言語を理解し、その底流にある文化を理解しあえば、幾多の困難も乗り越えられるとの理想を掲げ進んでいきたいと思っております。また、日中学院が少しでもその役に立ちたいという決意を新たにしております。

今年もまた、コロナが継続していく様相を呈しておりますが、姿勢をかがめていてもよくなるものではありません。したがって、学院もウィズコロナの新しい状況に対応して、新しい方向を模索していこうと思っております。ひとつは多少の投資をしてでも校内の通信状況をよくし、ネット環境を改善することを考えております。この状況下、首都圏だけでなく地方からのネット授業参加者を少しでも増やして、日中学院の素晴らしい授業コンテンツを広く提供できるようにしたいと考えています。また、編集委員会の先生方の努力で今年は新しい教科書『新学漢語』が出版される予定です。今までの教科書から、より現代に即した内容に大きく変更されています。さらに環境がそろえば短期留学や文化祭の拡大開催も考えたいと思います。ウィズコロナでありながらも新たな方向を打ち出し、新しい学院になれるよう教職員一同頑張っていきたいと思っております。教職員に限らず学生の皆さんにもぜひ日中学院の輪を広げようにご協力いただきたいと思っております。

さあ、今年もみんなで一緒に楽しく学習の輪を広げていきましょう。それが日中の懸け橋をよりたくできると信じて。

2022年1月 日中学院 学院長 小松健次



学好中国话，为日中友好起桥梁作用！

## 日中学院報

### 2022年冬

第550号

編集発行人・小松健次

定価1部100円／1年4回発行  
郵便振替 東京 00100-38184

〒112-0004 東京都文京区後楽1-5-3

TEL 03-3814-3591 FAX 03-3814-3590

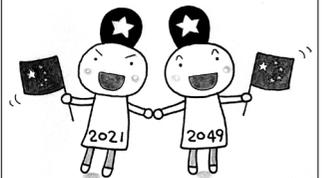
URL <https://www.rizhong.org/>

E-mail [info@rizhong.org](mailto:info@rizhong.org)



本科・日本語科浜離宮散策

#### A 先生の新語コーナー



#### liǎng ge yībǎinián “两个一百年”

二つの百年。中国共産党創立百年（2021年）と新中国成立百年（2049年）までの奮闘目標をさす。1997年の第15回党大会で二つの目標が初めて提起され、以降の各党大会でも言及されている。第一の目標は「小康社会の全面完成」でほぼ変わらないが、第二の目標は「近代化の基本的実現」から「近代的社会主义国の完成」、「近代的社会主义強国の全面完成」へと推移している。なお「近代化の基本的実現」は2035年の目標に前倒しされた。

(A)

今年度の文化祭は昨年度同様、規模を縮小して学習発表会という形で行いました。本科、日本語科で同じ昔話を中国語、日本語で発表しました。

## 文化は違えど文化祭

本科1年 我妻 里奏

十月三十日は、文化祭だった。

私は人前に立つのが苦手なので、夜も眠れなかった。文化祭が始まって発表が始まるまでも、出たくないと言っていてみんなを困らせてしまった。だが先生や同学、中国人の友達に手伝ってもらったこともあり、なんとか形にすることができた。まずはそれに心からの感謝を述べたい。本当にありがとうございました。

演目は全てが素晴らしかった。同学たちの発表は、何度もリハーサルをしたから内容は知っていたけれど、やはり舞台の上で見ると格別だった。本科二年生の発表は、私たちと勉強している時間は一年しか違わないはずなのに、密度が高く素晴らしかった。あと一年で私たちもあなるのだろうか、だとしたらこれからはきっともっと忙しくなるのだろうか、と思ったりもした。研究科の方々はとても落ち着いていて、こちらでもまた威厳を感じさせるような素晴らしい発表だった。有志による太極拳の軽やかな動きは、日々の鍛練を感じさせるものだった。

日本語科の二年生の劇は、もうとにかく可愛らしかった。我慢できなくて、閉幕後に女の子の頭を撫でたら笑われてしまった。男の子たちもしっかりしていて、立ち姿が堂々としていてしっかりとまっていた。そして三年生には何人か知り合いがいるのだが、役にぴったりの子だったり逆に全くはまっていない子がいたりして、全部が面白かった。けれどお世辞抜きにみんな日本語が上手で、かなりびっくりした。

文化祭が終わったあとの交流も楽しかった。写真を撮って、お菓子をみんなに渡して、発表についてたくさん褒めてもらった。ただ、楽しさの中で、やはり自分の未熟さは大いに感じた。発音はリハーサルの時点でかなり直されたし、中国人の友達や先生に「その表現では意味がわからない」と言われたりもした。だが私には、辞

書の通りに書いたのに、どうしてわからないのかわからない。語感と経験がないのだ。私がこの学院に在籍していられるのは、あと一年と半年間だけだ。その期間で私は一体どこまで成長できるのだろうか。

留学生の友人は、発表聞いた、正直お前の中国語は特別いいわけじゃない。普通。できるようになってと。これはさすがにちょっと手厳しくてウケた。わかった、手伝ってね、と言うと、いいよ、と返してくれた。友人と車で別れたあと、今日の出来事を反芻した。あんなに憂鬱だったのに、結局全て楽しかった。

言葉はやはり大切なものだ。私は日本語でさえも少し未熟なところがあって、色々な人を無意識に傷付けていることもあると思う。けれど本当に、私を好きでいてくれるみんなが大好きだよ、わかってきているかな。この学校に入ってから、時が経つのが速いと常々感じる。この半年で、私は何を得ただろうか？少し考えるだけで、愛しい同学たち、甘えればそれだけかわいがってくれる大人たち、中国人の友達も。たくさん思い浮かんで、書きながら今少し泣けてきてしまった。文化祭とそこでの交流を通し、日々を大事にしていかなければと改めて思わされた一日だった。



本科1年「詩の朗読」

## 文化祭

2年A組 孫岳

真っ青な秋晴れの下で、日中学院の文化祭が終わった。

一言で言うと、「すばらしい」だった。コロナ禍の中、行われた今回の文化祭は、学習成果の発表というだけでなく、深い意義を持っている。

まず、今回の文化祭の出し物で心に残ったことの一つは同じ昔話を、中国語クラスは中国語で紙芝居の形式で発表し、日本語クラスは日本語の舞台の形式でやったことだ。このような形式は非常に創意があり、中国と日本の学生間の交流を強めると思う。同時に、二言語でアプローチしたことで、内容に対してより深く理解ができ、とてもすばらしかった。

次に、クラスメートの親交を深めた。はじめての文化祭でみんなどうしたらいいかわからず、私も大学ま

で学校のイベントに参加したことがなかったが、今回は、クラスみんなの団結を感じ、とても感動した。一人一人の情熱、一人一人の努力と、最後の完璧なパフォーマンスは、先生のご指導のもとで、主役ならびにナレーターみんなが一緒に協力した結果だ。

私はこの機会を通じて、新しい学びがあったと思う。日本の昔話のようなものの悲しさを初めて知って、少しショックを受けた。「おきんの花かんざし」も「泣いた赤鬼」も少し悲しい結末だった。特に赤鬼が青鬼の手紙を読んでいる時、泣き出しそうだった。これはあるいは、日本文学の特徴かもしれない。幼稚なプロットや完璧な結末は生命の本質をさらけ出すことには及ばない。

わたしたちがここで言語学習するのは最終的な目的

ではない。言語はたくさんあるツールのただ一つで、更に重要なことは言語を通して、一国の社会や文化を知ることだ。今回の活動、文化祭に出たことで、日本の文化について普段の授業以上に理解することができた。

今年の文化祭は、驚きでいっぱいだった。終始ずばらしい時間だった。私にとって忘れることができない

ものとなった。唯一、残念なことは、マスクをしていて、みんなの笑顔が見られなかったことだ。このようなとき、これだけの文化祭を行うのは大変な苦労があったと思う。ここからとても感謝する。又の機会を楽しみにしている。



日本語科2年「おきんの花かんざし」



本科2年「こんとあき」



本科2年「小琴的花簪」

## 文化祭の感想

白駒の隙を過ぐるが如し。

知らないうちに日本に来て2年以上になる。日本に来たばかりの時、日本語が一言も話せなかったことを思い出す。日中学院の文化祭については、感想が多くて、どこから話したらいいのかわからない。初めての文化祭から始めよう。

初めての文化祭の時、私は新入生なので演目に出る必要はなかったが、小さいころから集団生活が苦手だったので、あまり参加したくなかった。携帯のメッセージで解決できるなら、絶対に自分からは人に話しかけない。日本で大学院を探す時は、教授に連絡しなくてもいいところを優先した。私の周りの工学系の友達は、多少なりとも対人恐怖症だ。そのため、初めての文化祭はほとんど交流もなく、ずっと隅に立っていて、時間がどんどん過ぎるだけで、どんな演目だったかも覚えていない。

2回目の文化祭の時、私たちのクラスは「白雪姫」の劇をした。人が少なかったので、7人の小人を1人で演じたりした。私は演技経験がないので、とても悩んだ。そして、その時は大学院の入試の準備をしていて、他のことにあまり時間をかけたくなかった。だから、一番セリフが少ない王子を演じたかった。でも先生は、獵師も演じなければだめだ、と言った。獵師のセリフも少ないので、喜んで引き受けた。普段の練習やリハーサルを経て、演技も少しずつ上達していった。しかし、公演の日に、緊張してセリフを忘れてしまった。とても気まずかったので、早くこのことは忘れたかった。

## 3年1組 陳逸楓

昨年は大学院の試験に落ちて、3年生となり、今回は三回目の文化祭になった。誰がどのパートを読むか決める時、私はセリフが少ない鬼がいいと希望した。それで赤鬼に決まった時、私はひそかに喜んだ。しかし、セリフは少ないが、演じてほしいと言われ、私はぼかんとした。前回の文化祭の苦い思い出が頭に浮かんだ。練習の時、先生が最後の場面を指導してくれたが、私はいつも笑ってしまった。やっぱり私には演技の才能がない、そもそも、どうして私のような工学系の学生が演技をしなければならないのだろう、と心の中で思った。何度かの練習を経て、多少は改善した。しかし最後のリハーサルの時、私の「泣いた赤鬼」は「笑った赤鬼」になってしまった。先生に何度もだめだと言われたが、泣けなくて困った。どうしよう、と思った。その時クラスメイトが、「泣くかわりに、床を手で叩いたら？」とアドバイスしてくれた。公演の日、練習の成果はそれほどではなかった。先生方は褒めてくれたが、私は結局、迫真の演技ができなかった。

今回が日中学院で最後の文化祭になったが、ここまで書いてきて、急に惜しくなった。日中学院にいる時間はもうあまりないからだ。私の潜在意識は文化祭に参加したくなかったが、文化祭のような活動がなければ、一生このような経験はできなかったかもしれない。文化祭のおかげで人生が少し豊かになった。先生方、ありがとうございました。クラスメイトにも出会えて、よかった。



日本語科3年「泣いた赤鬼」



本科有志「太極刀」



本研「紅鬼的眼泪」

# 図書室 だより

## 2022年も本をよろしく!

新着図書からおすすめの三冊をご紹介します。

### ●『安魂』周大新 著 谷川毅 訳 河出書房新社

今年1月15日から岩波ホールで公開される日向寺太郎映画監督(別科在籍)の日中合作映画『安魂』の原作。

監督は原作、及び御自身の作品について「かけがえのない人の死、それが自分より早く死ぬとは思ってもみなかった子供の死だとしたら。周大新さんの原作は周さんの実体験を基に小説化したもので、父と息子の魂の往復書簡のようで、やむにやまれず書いたものだということが痛いほどわかった。悲しみ、無念、後悔、絶望等々、渦巻きのように様々な感情が押し寄せる中、父親は亡くなった息子と向き合い、自身の人生を省みる。その姿を通して、残された者がどのようにして再び生きる力を得るのかを描きたいと思った。そしてそのことは、親子とは、死とは、魂とは、いのちの繋がりと、という根源的な問いに向き合うことだった。」と述べられています。

原作と映画を共にご覧いただくことで、作品に込めた思いがより深く伝わると思います。

### ●『眠りの航路』原著《睡眠的航線》

吳明益 著 倉本知明 訳 白水社



2018年国際ブッカー賞にノミネートされた『自転車泥棒』は当学院でも多くの方々に愛読していただきましたが、『眠りの航路』はその作家吳明益の長篇デビュー作です。

睡眠に異常を来した主人公「ぼく」は、太平洋戦争末期に少年工として神奈川県の高座海軍工廠で日本軍の戦闘機製造に従事した父、三郎の記憶へと向かっていきます。そしてその工廠の宿舎では平岡君(三島由紀夫)との出会いも…。この作品も個性溢れる登場人物によって台湾と日本の大きな関りが興味深く描かれ、読者を魅了していきます。

### ●『中国料理の世界史—美食のナショナリズムをこえて』岩間一弘 著 慶応義塾大学出版会



世界無形文化遺産への登録を目指す中国料理。すでに世界の国民食にもなってきたその美食たちは各国にどのように浸透していったのか、その興味深い歴史が大河ドラマのように語られていきます。

\*その他の新着図書は階段踊り場の図書室掲示板でお知らせしています。

## 活動報告

### ○手拭い絞り染め体験

11月24日日本語科の活動として、「染の里おちあい」で手拭い絞り染め体験を行いました。大好評でした。



### ○隅田川下りと浜離宮散策

本科・日本語科で隅田川下りと浜離宮を散策しました。9つの班に分かれ浅草から東京クルーズで浜離宮まで隅田川下りを楽しんだ後、浜離宮庭園を散策。冬晴れの中、本科・日本語科の交流ができました。今年もコロナ禍のためほとんどの活動が中止でしたが、後半に活動を行えました。



## 2022年度本科・本研入試

- ・3次募集 1/19(水)～1/31(月) 入試:2/2(水)
- ・4次募集 2/5(土)～3/10(木) 入試:3/12(土)
- ・5位募集 3/14(月)～3/24(木) 入試:3/26(土)

別科在籍者の方が合格すると、入学金が半額になります!!

## 1月開講検定対策講座

### ★中国語検定2級対策講座

2022年3月の中検に照準を合わせ、過去問題の解説や模擬試験を通して聴き取りや読解の訓練を行います。開講日:2022年1月15日(土)10:00～12:00 全8回 講師:戴曉旬 受講料:31,200円

### ★HSK 6級対策講座 (A)(B)

A 講座 (13:30～15:30) 講師:長澤文子・山本希和子  
・听力第1、2部・阅读部分

B 講座 (16:00～18:00) 講師:金鮮榮

・听力第3部・书写部分

開講日:2022年1月8日(土) 各全10回  
受講料:39,000円(A/B各) ※別途入学金

## 日本語科は2022年4月より、“進学科”を新設します。

◎第一志望の大学や大学院への合格を目標とする中国籍の学生が対象

◎より高度な日本語を幅広く学習

◎進学指導や面接練習などの個別指導も充実

詳しくはお問い合わせ下さい

